

# JDC ニュースレター

## 酪農家・酪農ヘルパー取材レポート(2016年・冬)

一般社団法人 **中央酪農会議** <http://www.dairy.co.jp/>

〒101-0044 東京都千代田区鍛冶町2-6-1 堀内ビルディング4階 TEL: 03-6688-9841 FAX: 03-6681-5295

### 奈良県五條市に見る、酪農家を支える「酪農ヘルパー」の活躍

365日、休みなく働く酪農家。その労働負担を軽減するために確立され、全国的に普及してきたのが「酪農ヘルパー制度」です。今や、酪農家にとってなくてはならない「酪農ヘルパー」について、利用組合を組織する奈良県五條市の酪農家と酪農ヘルパーの双方に取材し、その実態をレポート。さらに、酪農ヘルパーの全国組織の活動も報告します。

### 労働負担軽減の“決め手”となる酪農ヘルパー制度

#### ■中小規模の酪農家が主流を占める奈良県

奈良県で近代酪農が始まったのは、明治時代のこと。戦後になって酪農家の戸数と乳牛の飼養頭数がともに年々拡大し、地域産業として確立されました。

県内40市町村中、16市町村で酪農が営まれています。県全体の酪農家戸数は平成27年2月1日現在で56戸、1戸あたりの成畜(分べんの経験がある牛もしくは2歳以上の牛)の飼養頭数は平均で約60頭、80頭未満の酪農家が約9割を占め、中小規模で家族経営の酪農家が多くなっています。(農林水産省・畜産統計より)

#### ■年中無休の過酷な労働

奈良県の酪農は、一大消費地である大阪府に隣接し、その需要に応える“都市型酪農”として栄えてきました。輸送コストを抑え新鮮な生乳を供給する事が可能で、乳価(酪農家が受け取る生乳の取引価格)も比較的高く取引されてきました。

しかし、その奈良県も、日本の他の酪農地域の多くが抱える高齢化、後継者不足という問題に悩まされています。しかも、ここ数年の飼料価格の高止まりなどによるコスト増を受けて、酪農家戸数は年々、減少し続けています。

そこに追い打ちをかけるのが労働の過酷さです。酪農業は、農林水産業の中でも最も休みの取り難い仕事といわれてきました。生き物である乳牛を相手に、365日、1日たりとも休むことができません、それが酪農家の大きな負担になっていたのです。

### 地域酪農の持続可能性を高める酪農ヘルパー制度

このような状況を鑑み、酪農家が定期的に休日をとって“ゆとりある酪農経営”を確立できるように「酪農ヘルパー制度」の普及定着が、国や地方自治体、農協等が一体となって図られてきました。

「酪農ヘルパー」とは、酪農家に代わって毎月数日、搾乳や給餌、

牛舎の清掃などを行う人のことをいいます。

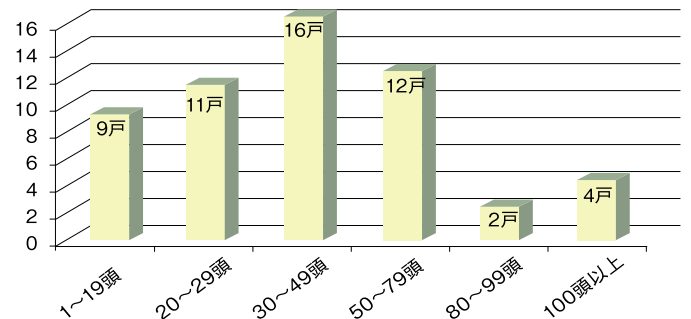
酪農ヘルパーは、特に、従業員を雇うことのできない家族経営の酪農家にとって、労働負担軽減の“決め手”となる必要不可欠な存在です。また、それは、地域にこれまでなかった新たな労働力を呼び込み、地域酪農を活性化させ、持続可能性を高めるための重要なシステムとしても機能しているのです。

#### ■奈良県では約8割の酪農家が酪農ヘルパーを利用

奈良県では、県内酪農ヘルパー事業事務局(奈良県酪農農業協同組合内)の統括のもと、現在、五條酪農ヘルパー利用組合(五條市地域)、南和酪農ヘルパー利用組合(御所市、葛城市、橿原市地域)、北和酪農ヘルパー利用組合(奈良市、天理市、宇陀市地域)の3つの利用組合で酪農ヘルパー事業が運営されています。3つの利用組合には合計8名の酪農ヘルパーが所属し、43戸の酪農家(県内酪農家の約8割)が利用組合に加入し、利用することに利用料金を支払います。

#### (奈良県内酪農家の成畜飼養頭数別戸数)

主に、80頭未満の家族経営の酪農家で、酪農ヘルパーが利用されている。



※子畜のみ、学校(非営利的飼養者)は除く

(平成27年・農林水産省調べ)

#### (奈良県の酪農ヘルパー事業(概要))

利用組合名	加入酪農家戸数	専任酪農ヘルパー人数
五條酪農ヘルパー利用組合(五條市地域)	13戸	3名
南和酪農ヘルパー利用組合(御所市、葛城市、橿原市地域)	15戸	3名
北和酪農ヘルパー利用組合(奈良市、天理市、宇陀市地域)	15戸	2名
計	43戸	8名

## 酪農ヘルパー利用酪農家に聞く、そのニーズ、満足度

五條酪農ヘルパー利用組合長  
小羽根修さん



### 酪農ヘルパーなくして成り立たない 今日の酪農経営

奈良県五條市は、特に酪農に適した土地というわけではありません。しかし、大消費地である大阪府に近いこと、また、近隣の稲作農家から出る稲わらや、ビール工場から出るビール粕や豆腐工場から出る豆腐粕（おから）を乳牛の飼料に使用できたことなどから、戦後、稲作等との兼業で乳牛を数頭飼いはじめた農家が徐々に増え、県内外で酪農地帯として知られるようになりました。

やがて1~2頭を飼う兼業農家が辞めていく一方で、残った酪農家は生産技術等の近代化に伴い頭数を増やし、規模拡大・専門化していきました。ここ何年もの間、県内の1戸あたり飼養頭数が増加傾向である一方、酪農家の戸数は右肩下がりという状況で、今日に至っています。

### 生き物が相手であるがゆえに 休みのない「酪農」という仕事

私自身は、30代までサラリーマンをやっていて、その後、両親から経営を継いで酪農の世界に入りました。以来、32年間、この仕事を続けてきました。現在は約40頭の経産牛（お産を経て乳を出す乳牛）を飼養しています。

経営を継いだ当時、酪農の仕事は、体がつらくても休めず、親が亡くなった日でも朝から作業をする、そういう仕事でした。「何のためにこんなに休みのない仕事をやっているんだろう？」とよく思ったものです。赤ちゃんを産んだ乳牛は、毎日乳を搾らないと病気になってしまいます。それに巨体を維持するために毎日、大量の餌を食べ、糞尿を出します。こちらが休みたいからといって、「今日は搾乳を休みます」「今日は餌はあげません」というわけにはいかないのです。

酪農は、牛舎やパイプラインミルクナーなどの搾乳機器、搾った生乳を冷やしながら保管するバルククーラーをはじめとする多くの設備・機械への投資が必要です。投資をすれば回収するために働き、また、規模を拡大するということを繰り返してきました。多くの酪農家が、このような事情を背景に、「休みなき酪農」を続けてきたのです。

### 「転機」となった酪農ヘルパー制度の導入

こうした状況に「転機」をもたらしたのが酪農ヘルパー制度です。飼養頭数が少なく従業員を雇用しない家族経営の酪農家が集まって、みんなで共同雇用するという発想で作られはじめ、約25年前に国の事業が措置されたことなどから、全国的に広がっていきました。ここ五條市地域もそれを歓迎し、奈良県内で最も早く導入、積極的な利用促進が図られてきました。五條市には仕事に熱心で切磋琢磨する気風があり、酪農家の問題意識も高かったのです。

現在、五條市には15戸の酪農家があり、うち13戸が五條酪農ヘルパー利用組合に加入しています。加入酪農家のほとんどが、20~60頭規模の家族経営の酪農家で、家族の誰かが休暇を取るために酪農ヘルパーを利用しています。一方、従業員を雇う規模の酪農家でも、従業員に休暇を与えるために酪農ヘルパーを利用するケースがあります。

去年10月のTPP大筋合意もあり、今は酪農家にとって大変な時期。地域が継続して発展するためには後継者が必要ですが、今の若い人にとっては休みがあるのが当たり前。このヘルパー制度によって、少なくとも月1回は休みを取ることができます。

### 怪我や冠婚葬祭は最優先

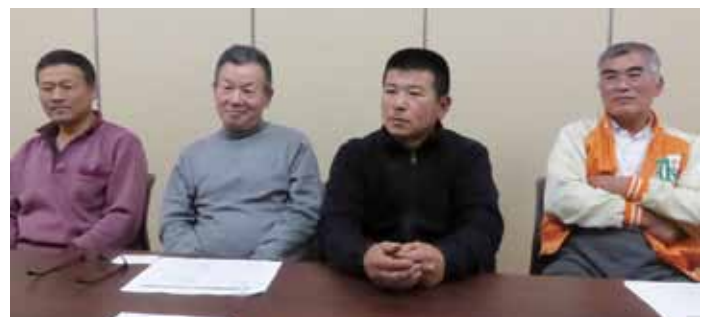
当利用組合では、酪農ヘルパーは、正社員として雇用し、労働保険、社会保険、傷害保険なども完備し、一般企業と同等の待遇で働いています。酪農ヘルパー雇用のため、利用組合の組合員には酪農ヘルパーの利用割り当てがあり、1戸あたり月2~3日は利用するように決められています。13戸の組合員に対して3名の専任酪農ヘルパーがいて、彼らのスケジュールがほど良く埋まります。毎月、組合員全員が参加する会議で利用予定日を決めますが、決められた予定に関わらず、予期せぬ病気や怪我、冠婚葬祭の場合は、それらを優先したスケジュールに再調整します。こうした不測の事態に対応するのが酪農ヘルパー制度を導入した大きな目的のひとつでもあるので、組合員は、そのようなときは気持ちよく譲り合います。

### 酪農家に寄り添う心強い存在

酪農家という仕事は、毎日の搾乳や餌やりに加え、1頭1頭異なる乳牛の健康管理や病気の予防、牛舎や機器等の衛生管理、糞尿処理など、日々、真剣勝負です。こうした厳しい業務にも、酪農ヘルパーはぴったり寄り添って助けてくれる心強い存在です。

ヘルパー制度導入当初、酪農家の中には、他の人に仕事を任せられることを不安視する声もありました。それでも、3カ月の研修期間を経て業務に就いていただくと、何の支障もなく仕事を行えるようになります。

特に、今、酪農ヘルパーをお願いしている3名は、みな、非常に良くやってくれています。年齢的にも後継者に近く、地域に活気をもたらしてくれています。気立ても良く、酪農家が望むことを的確にやってくれて頭が下がります。安心して任せられる存在で、利用酪農家の満足度は非常に高いですね。



### 酪農ヘルパーの必要性を切々と語る酪農家の皆さん

この日、お話を伺った五條酪農ヘルパー利用組合に所属する酪農家たち。左から、上田英雄さん、小羽根組合長、坂上正昭さん、住田治貞さん。いずれも家族経営の中堅酪農家で、「酪農ヘルパーなしの酪農経営は考えられない」と口をそろえて力説する。

## 酪農ヘルパーに聞く仕事への思い、そのこだわり

五條酪農ヘルパー利用組合所属・専任酪農ヘルパー  
島田隆生さん・村越俊介さん・切幡幸仁さん

### 酪農ヘルパーはサービス業 個々の酪農家への対応力も重要

現在、五條酪農ヘルパー利用組合には、島田隆生さん(51歳)、村越俊介さん(34歳)、切幡幸仁さん(41歳)の3名の専任酪農ヘルパーが所属し、酪農家たちを支えています。この3名に、仕事への思いや活躍ぶりなどについて聞いてみました。

#### 一 酪農ヘルパーになった経緯、酪農ヘルパー歴は？



**島田さん** 私は奈良県出身で、農業高校の畜産科を卒業後、兵庫県の個人牧場に従業員として7年間勤めました。その後、サラリーマンを経て、北海道で酪農ヘルパーを8年続け、結婚を機に地元に戻りこの仕事に就きました。ここでの酪農ヘルパー歴は11年です。約30年、牛の仕事に就き、そのうち20年近く酪農ヘルパーをしています。



**村越さん** 愛媛県で生まれ育ち、高校卒業後、20歳のときにバイクで北海道に行きました。そこでお金が尽きたので観光牧場で働いたら牛の魅力に取りつかれ、北海道の畜産大学に入りました。大学卒業後2年間北海道にいて、その後、兵庫県で畜産(肉牛)に携わり、岐阜県で1年、滋賀県で5年、ここで2年酪農ヘルパーをやっています。酪農ヘルパー歴は計8年です。



**切幡さん** 私は、地元奈良市内の高校を卒業して24歳まで6年間三重県で調理師をやり、地元に戻ったら酪農ヘルパーを募集していたので応募してこの仕事に就きました。その後、いったん食品工場に転職して、また、この仕事に戻ってきました。酪農ヘルパー歴は計14年です。

#### 一 酪農ヘルパーの魅力とは？

**島田さん** 若い頃から動物が好きでしたが、自分が酪農家になるつもりはありませんでした。それでも、一頭でも多くの牛に関わりたい、そんな思いが満たされるのが酪農ヘルパーの大きな魅力です。

**村越さん** 酪農ヘルパーは、数多くの酪農家を見ることができて、情報もたくさん入ってくるのがメリットです。もちろん、大好きな牛をいっぱい見ることができるのも大きな魅力ですね。でも、私としては、酪農家として自らが経営者となってやってみたいという気持ちもあります。

**切幡さん** 私の場合、他の二人と違って、飲食・食品業界に携わってきて、食材の生産や調達にも興味がありました。牛乳の生産現場そのものに携われることが、私にとっては大きな魅力です。また、正規雇用で生活が安定するのも魅力です。

#### 一 仕事上のこだわり、ポイントは？

**島田さん** 酪農ヘルパーという仕事は、酪農家に対してはサービス業になるので、不快に思われたり、来て欲しくないと思われたくはありません。お互い、気持ちよく仕事ができるよう、普段から言葉使いや態度には気をつけています。酪農家へのアドバイスは、求められない限りしません。みなさん、こだわりを持ってやられていますので、それに合わせて仕事を行う、それが暗黙のルールです。

**村越さん** 酪農家さんは、それぞれにやり方が違うので、それを理解し個々に対応することがポイントです。単に作業をこなすのではなく、何を求めているかを考えながら作業することが必要となります。また、生き物である乳牛を扱い、人の口に入る食品に関わる仕事。事故が起こらないよう細心の注意を払うことも重要です。

**切幡さん** 酪農の仕事は、給餌と搾乳のタイミングに合わせ、早朝と夕方、集中的に作業を行い、昼の時間帯は休憩時間となります。このリズムに生活を合わせ、体調管理を行うこともポイントです。あとは、やはり酪農家とのコミュニケーションが重要です。すべての酪農家さんに対して同じような気持ちで対応しています。

#### 一 酪農ヘルパーを目指す人にメッセージをお願いします。

**島田さん** 動物が好きなのは、職業の選択肢の一つとして考えてみてはいかがでしょうか。力仕事もありますが「牛が好きなこと」、それが最大の適性です。

**村越さん** 今、酪農ヘルパーの需要は非常に高まっていると思います。酪農ヘルパーになって、ずっとそれを続けることも業界的には必要です。しかし、後継者や新規就農を目指す人にとっては、様々な経営を見ることが出来ますから、自らが酪農家になるためのステップと捉えてもよいと思います。

**切幡さん** 私は、牛が好きというより食品関係が好きで酪農ヘルパーになりましたので、最初はうまくやれるのか不安がありました。しかし、仲間にも恵まれて、研修制度も整っていたため、楽しく仕事できています。ぜひ、未経験の方でも挑戦してみてください。



酪農家を支える頼もしい存在(左から島田さん、村越さん、切幡さん)

## 制度の普及・啓発、利用促進と、 新規酪農ヘルパーの増員に向けて

一般社団法人酪農ヘルパー全国協会  
事務局長 佐藤千秋さん



### 家族経営主体の日本酪農に 欠かせない酪農ヘルパー

わが国の多くの酪農経営は、家族経営を主体としています。酪農は、毎日の搾乳・給餌・牛舎清掃等の作業が必要であり、休日がとりにくい仕事です。それが酪農家の大きな負担となり、また、後継者や新たな担い手が就農、定着しにくい要因の一つとなっています。

### 古き良き助け合いの文化に基づき 確立された制度

日本の集落には、特に酪農に限らず生活の多くの場面で、相互扶助という文化がありました。この古き良き助け合いの文化を基に、昭和50年代に全国各地で、定期的な休日の確保、労働時間の短縮等の「ゆとりある酪農経営」に応えるべく、酪農ヘルパー組織が設立され始めました。

このような状況下で誕生した酪農ヘルパー制度について、全国的な普及・啓発、利用促進と酪農ヘルパーの人材確保、育成に資するため、平成2年度に、国の指定助成事業「酪農ヘルパー事業円滑化対策事業」が創設され、ヘルパー制度確立のため酪農ヘルパー全国協会が設立されました。当協会では主に、(1)酪農ヘルパー利用組合の組織運営体制及び利用実績等の調査、酪農ヘルパーに関するデータベースシステムの整備・研修会及び情報提供、(2)優良事例調査及び優良事例普及・啓発のための発表会の開催、(3)雇用後1年以内の専任ヘルパーを対象とした初任者研修、(4)酪農ヘルパー事業推進のための会議の開催及び指導の実施などを業務として行っています。

### 酪農ヘルパーや利用組合の取り組みを 優良事例として紹介

(2)の優良事例については、毎年12月に①利用組合の活動事例、②経験豊富な酪農ヘルパー、③酪農ヘルパーから新規就農した人の3事例について発表を行っています。

平成27年度は、①については北海道農業協同組合中央会が、就職に直結する学生や専門学校生に呼びかけ、酪農ヘルパーを体験してもらう取組を行い、45名の定員に対し62名の参加者を集めました。②では10年のキャリアを有する千葉県的女性酪農ヘルパーについて、また、③では、柔道整復師から酪農ヘルパーを経て酪農家として新規就農した鹿児島県の20代の夫婦について優良事例として発表されました。このような優良事例は、他の地域においてもモデルケースとなるため、当協会では、積極的に酪農業界内に対しても普及・啓発を行っています。

## 充実した初任者研修で人材育成を フォローアップ

(3)の初任者研修では、牛の生理・生態や酪農のノウハウ、さらに酪農家等と確実な意思疎通を図るためのコミュニケーション術を学び、実習で搾乳などの酪農ヘルパーとしての基本的な作業内容の確認を研修してもらいます。また、就業して概ね3年以上の酪農ヘルパーを対象にスキルアップのため中級者研修も実施しています。



初任者研修の様子



初任者研修における搾乳実習。経験豊富な先輩ヘルパーが熱心に指導

## 高まるニーズ、不足する人材

現在、全国の酪農家の70%が酪農ヘルパーを利用しています。一方ヘルパーになる方は、最近では酪農後継者だけでなく、若いビジネスマンやOLからの転身者も増え、全国で2,071人に達しています(平成27年・当協会調べ)。しかし、酪農ヘルパーの数は充分とはいえません。このため当協会では、全国各地の農業求人フェア等に積極的に参加し、PR活動を行っています。酪農ヘルパーは、未経験だからできないということは全くありません。充実した研修制度により酪農家を支え、地域産業の振興に資する制度のもと、誇りを持って仕事をすることができます。動物好きであれば、ぜひトライしてみてください。

### 一般社団法人酪農ヘルパー全国協会

会長 砂金 甚太郎

住所 東京都千代田区内神田2丁目5番3号 兎谷ビル2階

電話 03-5577-5135

HP d-helper.lin.gr.jp/